

## 渋谷ラジオ #24 「あれから、これから」

その1 「白鳥さんと鑑賞、PICFA 見学ツアー」 第1話：見学前夜 ※約30分

**出演** ゲスト・白鳥建二（全盲の美術鑑賞者、写真家）、岩中可南子（アートマネージャー、編集者）、進行・門あすか（東京都渋谷公園通りギャラリー）

門 みなさんこんにちは。この番組は、東京都渋谷公園通りギャラリーがお送りする渋谷ラジオです。ギャラリーというと、作品を見に行くところという印象があるかと思いますが、この音声配信のプログラムでは、ギャラリーの学芸員が気になるテーマを設定し、作家や専門家に限らず、様々な人の生の声をお伝えしています。シリーズ3年目となる令和7年度の番組は、「あれから、これから」のタイトルで、これまでにギャラリーの展覧会やイベントで一緒した方をゲストに迎え、あれこれお聞きしながら、ゲストの活動の軌跡をたどります。ナビゲーターを務めるのは、私、東京都渋谷公園通りギャラリー門 [ルビ：モン] あすかです。収録はスタジオではなく、ゲストと現地に赴いて行きます。訪れるのは、ゲストが今、気になる場所です。お出かけレポートの雰囲気、皆様も一緒にお楽しみください。

（ジングル：ottotto 「CLAP」）

さて、「あれから、これから」最初のゲストは、全盲の美術鑑賞者で写真家の白鳥建二さんと、編集者で白鳥さんのマネージャーの岩中可南子さんです。白鳥さんは、東京都渋谷公園通りギャラリーで、2022年から不定期で開催している鑑賞会「みると話」のナビゲーターを務めてくださっています。タイトルは、話すという漢字を「わ」と音読みして、「みるとわ」です。このタイトル、会話の輪が広がるの「わ」と、鑑賞会の時に盛り上がると、漫画の擬音のように「ワッ」と場が湧く様子をイメージして付けました。私の経験、白鳥さんと鑑賞した後に自分の作品を見る視点が変わって、「見るとは、こういうことか」と思った実感も重ねています。

岩中さんは、「福祉をたずねるクリエイティブマガジン〈こここ〉」の編集者で、ギャラリーもたびたび取材していただいています。白鳥さんのマネージャーも務めておられ、今回も岩中さんに色々ご相談しながら旅の調整をしました。鑑賞会の時には、白鳥さんのパートナーもお願いしています。

（ジングル：ottotto 「CLAP」）

門 さて、自己紹介をお願いしますでしょうか。白鳥さん、岩中さんの順でお願いします。

白鳥 全盲の美術鑑賞者と名乗って活動しています、白鳥建二です。僕は、もともとマッサージが本業で、ずっとやってたんですけども、会話をしながら鑑賞するという、そういう鑑賞会に関わるようになったのは、もうどうだろうな、25年くらい前の話で、マッサージ屋さんを本業でやってた時は、年に1回とか2回とかの鑑賞会のナビゲーター役をやってたんですけども、2019年から、それまで時々関わってきた鑑賞会とか、そういうことに真剣に向き合ってみようかなと思って、それまでやってたマッサージ屋さんを辞めて、フリーで活動を始めたというのが、2019年から。ここ数年は、日本全国あちこちで、しゃべりながら見る鑑賞会を企画してもらっているので、そのナビゲーター役として、年に十何箇所とか展覧会に行って、鑑賞会をやっています。

門 続いて、岩中さんお願いします。

岩中 岩中可南子と申します。今日は白鳥さんのマネージャーとして一緒に来ていますが、普段はフリーランスでアートマネジメントの仕事とか編集の仕事をしています。アートマネージャーというと、あまり聞きなじみがないかもしれませんが、広くアートに関わるイベントとかプログラムのマネジメント、企画とか運営とかに携わっています。美術館とか劇場でやる作品展というよりも、どっちかというところと街中でやったりとか、芸術祭で地域と一緒に何かやったりとか。あと、プロのアーティストじゃない人と一緒に地域でワークショップを通して作品を作ったりとか、そういう参加型のプログラムのマネジメントとかに関わることが多いかなと思います。あとは、福祉施設に通って利用者さんと交流したり、そういう活動をやったりとか。さっき門さんにもご紹介していただいたんですけど、〈ここ〉っていうマガジンハウスが2021年にスタートしたウェブマガジンがありまして、「福祉を訪ねるクリエイティブマガジン」というテーマでやってるんですけど、様々な福祉の現場を訪ねて、そこにある表現活動とかを紹介していくウェブマガジンで、その編集部の仕事もしております。

門 お二人と一緒に始めたきっかけって何だったんですか？

白鳥 きっかけはですね、そもそも共通の友達がいる、その人と一緒に飲み歩くっていう、飲み友がもともとだったんだよね。それがいつ？2022年くらい。で、その22年頃って、僕のことを題材にした映画ができたりとか、こういう、しゃべりながら鑑賞の話題なんかがいっぱい詰め込まれた本が出たりとかして、すごい忙しくなってきた時期で、メールのやり取りとか事務処理とか、一年くらい一人でやってたんだけど、一人でっていうか、自分でやってたんだけど、これはもう無理だって限界を感じて。で、岩中さんをお願いしたっていう。

岩中 そうですね、それが2023年かな？

白鳥 春だね。

岩中 最初に長野の複数の箇所で鑑賞会と上映会をやる機会があって、その時に声をかけてもらって一緒に行ったのが初めて。その後からレギュラーで関わるようになったんですけど、普段、事務的な対応したりとか、打ち合わせ一緒にしたりとか、鑑賞会の時に一緒に行ったりとか。あと、最近写真家として白鳥さんが展示に参加する機会も増えてきたので、そういう調整とかやったり、打ち上げで一緒に飲んだりとかしてきた。

門 飲みのワードが多い。

岩中 元々、飲み友だったので、それは引き続きという感じです。

白鳥 という、2年半くらい。

岩中 そうですね、もう2年半くらいかな。全国いろんなところ一緒に行けました。

門 私と白鳥さんが出会ったのは、私がまだ別の美術館で普及担当をしている時に、鑑賞のプログラムを作らないといけないのだけど、なかなか企画の内容にOKをもらえなくて、鑑賞を楽しんでいる人って誰だと思いついて聞いて回ったんですよ。そしたら、白鳥さんと鑑賞してみるといいよ、ということになって。それで、白鳥さんとは一緒に鑑賞をしていただいた後、企画もやるというふうになった。

白鳥 門さんと最初に会ったのは2017年とかだよ、きっと。

門 多分、17か18か、そのくらいですね。

白鳥 特に特別、僕のことを有名だったわけじゃなくて。その美術館には20年以上前に、一人で

美術館に遊びに行くという活動をしていた時に、もうすでにそこに行っていて、その美術館の人と知り合いになっている人が多かったっていうのもあったと思う。

門 確かに。でも聞く人聞く人、白鳥さんって言われて。

岩中 どんな人か気になりますよね。

門 私は、まだ会ったこともないし、その頃まだ本とかも出てなかったの。

白鳥 だから、本当にごくごく一部の人たちに知られているっていう存在だったと思う。

門 ちょっと話は飛んでしまうんですが、水戸芸術館では、もう長くやってらっしゃったじゃないですか。

白鳥 そうだね。水戸芸術館で、今、年に1回、しゃべりながら鑑賞するっていう、水戸芸では「session!」（「視覚に障害のある人との鑑賞ツアー session!」参考：水戸芸術館現代美術センターよみものアーカイブ#2-1「視覚に障害がある人との鑑賞ツアー session!」とは？ [https://www.arttowermito.or.jp/topics/article\\_41414.html](https://www.arttowermito.or.jp/topics/article_41414.html) ※外部サイト）っていうタイトルでやってるんだけど、それは2010年から始まっているので。そうですね。

門 私が、今のギャラリーで、白鳥さんにナビゲーターをお願いしている「みると話」は、ギャラリーの展覧会の関連イベントとして不定期でやってるんですけど、1回目は2022年の展覧会のタイトルが「アール・ブリュット 2022 巡回展 かわるかたち」

（<https://inclusion-art.jp/archive/exhibition/2022/20220716-145.html>）というものの中でやっていただいたんですが、この時、3回行った。白鳥さんが初回コロナにかかってしまって延期した回です。その後、年に1~2回ぐらいのペースで続けてきていて、手話通訳付きで実施した時は、ろうの方だけでなく、手話を勉強中の方が参加してくださったりとか、たまたま参加者の半分が学芸員だったりとか。本当にいろんなことがあった。さっき映画の話が出ましたけれども、2023年の「モノクローム 描くこと」展では、作品解説のような音声ガイドの感じで、白鳥さんと、白鳥さんが出演した映画の監督の三好大輔さんたちと行った鑑賞会の音声を録音編集して、会場で聞けるという企画もしました。

白鳥さんの鑑賞会ってどんなものかっていうのを少しご説明いただいてもいいですか？

白鳥 そうですね、すごく簡単に言っちゃうと、作品の前で何人か集まって、作品に関する話を自由に話していると、なんとなく鑑賞をしたような気分になるっていう、まあそんなやつなんですけど。ざっくり言うと。具体的に言うと、いつも鑑賞会で説明するときは、一つの作品を15分とか20分かけて見るんだけど、僕含めて一緒に見る人は5、6名で、作品に関することだったら本当に何を話してもらっても大丈夫ということで、いつも鑑賞会やってます。作品の大きさとか色とか形とか、そういう目で見て言葉にできることっていうのが一つあって、その他のこととして、作品を見て思い出したこととか、連想したこととか、想像したこととか、あと15分とか20分同じ作品見ると、最初のイメージと変わっていくっていう、印象と変わっていくっていうこともよくあって、そういうそれぞれの頭の中で起きていることを言葉にしてみるっていう。それが集まった5、6人で会話をするような感じで進んでいったらいいなっていう風に、いつも案内をしてから、鑑賞会を始めています。

門 岩中さん、何か補足ありますか？

岩中 そうですね。毎回、白鳥さんとも話すんですけど、毎回、全然違う雰囲気なのが面白くて。一つの作品を15分、5、6人で見るんですけど、例えば午前の回と午後の回で同じ作品を見たとしても、一緒に見る人が変わると全然変わったりするんですよね。作品のイメ

ーじすら真逆だったりとか。最初のスタートは一緒でも、展開が全然違ったりとか。それが、すごい面白い。

白鳥 それが普通なんだよね。特別なことじゃなくて。

岩中 盛り上がる回もあれば、すごくシーンとする回もあったり。でも後からじわじわ響く回もあったり。毎回全然違うっていうのがやってて飽きないというか、面白さの一つだなと思っています。

門 確かに。白鳥さんとは15回くらい鑑賞会をしていると私も思うんですけど、毎回思うのは、一個の展覧会で何回かやるのが面白いですよ。しかも、大体参加してくれるのは大人の方が多いじゃないですか。たまに子どもも混ざっていると、子どもに大人が触発されちゃう感じが、すごい面白くなって思うんです。

白鳥 門さんとやったとき、子どもとの会ってあったっけ？

門 前にいた美術館で、中学生10人くらいとワークショップと絡めてやったりしたときとか。ちょっと忘れちゃったんですけど、お子さん連れてきた方、親子がいらしたんでしたっけね。鑑賞会を展示室で開館時間にやっていると、気がつく知らない人が混ざっているとか。それを鑑賞会の参加者が自然と受け入れて、そのまま振り返りまで一緒にやったこともありましたよね。許し合える感じがすごかったなっていう。ハプニングも結構いろいろありました。

白鳥 おしゃべりしながら鑑賞していると、面白いと思って近づいてくるのか、説明を聞きたいと思って近づいてくるのか、いろいろあると思うんだけど、とにかく予定していない一般の、来場者の人がいつの間にか後ろにくっついてきているということが、これも珍しくないことだね。

岩中 みんなが話しているのを聞くと、たぶん話したくなるんでしょうね。私はこう思うみたいな感じで、自然と会話に入ってきたら。

門 鑑賞をした後の振り返りの時間が本当に楽しいですよ。みんな好き勝手にしゃべった後、ちょっと高揚した状態で、集まってもう一回お話するという状況が、グルーブを生む。ギャラリーの鑑賞会の後、みんなが連絡先を交換している時とかあったじゃないですか。あれがね、みんな別々の場所から来て、地方の方とかも確か居たんですけど、年齢も全然違うのに、本当に良かったなって思ったんですよ。

白鳥 仲良くなっているような気分になっちゃうんだよね。

岩中 2時間くらいだけど、同じ体験を一緒にしたみたいな、絵と一緒に見ただけなのに、その人のことをすごく深く知ったみたいな、あの人はこういう人だよ、みたいな。

白鳥 だいたい勘違い。

門 そんなこと言わないで。

白鳥 勘違いするのが良いところなんだ。

岩中 一緒に時間を過ごしたなって、共有できたなって思える時間っていうか。

白鳥 だって鑑賞もさ、作品が目の前にあるだけじゃ、鑑賞にはなってないじゃん。だけど、やっぱり良い鑑賞ができた、良い鑑賞っていうかさ、鑑賞体験良かったなっていう時は、やっぱりどっかの時点で、鑑賞できたとかさ、作品に近づけたとか、なんかそういうようなのが、どっかの時点であるんだよ。だけど、それは毎回、同じキーワードじゃないと思うし、あんまり予測もできない。

岩中 白鳥さんの思う、良い鑑賞会だったな、みたいなって、どういう時がそうなんですか？

白鳥 俺はね、個人的には、何回も思い出せる。

岩中 反芻する。

門 こんなにやってるのに、思い出せるんですか？

白鳥 丁寧に思い出すとね、結構思い出せるね。だって、その昔はさ、その昔はっていうか、2019年で、フリーで活動する前は、その鑑賞会に参加するのが、年に1回とか2回とかだったから、もう1回鑑賞会すると、少なくとも2週間くらいは、その余韻で楽しめるっていう。それはね、本気で思ってたし、そうだったと思うんだよね、その頃は。

門 確かに、そうおっしゃってました。

白鳥 それくらい、いろんな情報が詰まった鑑賞になるんですよ、自分の場合は。

岩中 面白い。

白鳥 そうそう。

門 確かに。でも、それがだんだん忙しくなって、毎週鑑賞会やってるよって、おっしゃってた時もあるじゃないですか。どんな感じになるんですか？

白鳥 あのね、思い出す暇がないっていうのは、あるんだけど。

岩中 もったいない。

白鳥 そう、もったいないんだよね。なんだけど、内容自体はね、いいですね、毎回。空振りする回がない、っていう感じなんだけど。逆に言うと、失敗を作らないっていう。例えば、これ門さんに言うのあれなんですけど、美術館がやる鑑賞教育だとさ、やっぱりどうしても作品を知ってほしいとかさ、作家のことを知ってほしいとかさ。

門 何か成果を求めちゃうみたいなの？

白鳥 何かしらあるんだよね。それは別に悪いことじゃないんだけど。そうすると、最後になって、それが何も残ってないと、例えば、この作品全然大したことなかったなって、シャラって終わっちゃうと、やっぱり、それ、ガクってくるじゃん。今回は、うまくいかなかったね、みたいなことになると思う。だけど、僕は、一鑑賞者、一美術館利用者っていう立ち位置でやってるから、その辺もどっちでもいいんですよ。こういう、しゃべりながら鑑賞するのが良かった、楽しい、これからもやってみたいって思う人がいてもいいし、これは自分に合わないなって思ってくれてもいいし、それも含めて、どっちに転がっても得るものはあるなと思ってるので、だから失敗がない。

門 毎回全然違うし、失敗っていうのは見たことがないなって、これだけやっても思うんですけど、たくさんやっていただいたからこそ、思うのは、どんなにこっちが予想しても違いますよね。

白鳥 予定通りにならないね。例えば、この作品でこういう話題になるだろうと思ったとしても、外すよね。大体外れるね。

門 この作品がいいんじゃないかって思って選んでも、じゃあ（次は）、みんなで自由に選んでくださいって言ったやつの方が、めちゃめちゃ盛り上がりだったりとか。

白鳥 それもよくあるよくある。

門 全然誰もしゃべらないときがあったのを覚えてますか？ 私は外野として、あ、最初は白鳥さんのパートナーを私がしてたんですけど、運営とパートナー、両方やるとかなり忙しすぎて、最近はパートナーは誰か別の人がしてるんですけど、（私は）外から見ると一番おいしい役をして、外から見て、これはちょっと何かチャチャを入れた方がいいのになって、冷や冷やするぐらい誰もしゃべらなかつたのが、確かね、2023年の「モノクローム

描くこと」展の時にあって。

白鳥 いや、それがいいんですよ。

岩中 緊張感ありますよね？

白鳥 緊張感あるんですよ。

岩中 シャベろうかな、どうしようかなっていう、じわじわ。

白鳥 シャベってもらった方が、楽しさとかさ、参加者の人がどういうことを思ってるかっていうのが分かりやすいんで、そっちに寄りがちなんだけど。

門 確かに。

白鳥 実は黙ってても、参加者の人は結構作品のこと真剣に見てたりするので、その時間、すごいいいはずなんです。けど、運営する側としては、参加者が黙っていると、緊張するんだけど、ここで何か言った方がいいのかどうかっていうね。けど、あれの緊張がいいよね。もうね、たまらんっていう。

岩中 そういう時、白鳥さん、あえて黙ってますよね。聞いてるといっか、待ってるといっか、誰かが口火を切るまで。

白鳥 やっぱりあそこでしゃべっちゃうと、教育的になっちゃうんですよ。ここでこういう話題に行った方がいいんじゃない？みたいなさ。別に、それ、悪くないんだけど、俺はそういう風になりたくないっていう、個人的あれで、待つっていう。

門 確かに。そこが引き出すきっかけに逆になってる。

白鳥 「無言のファシリテート」とか言われてるけど。

岩中 カッコいい、そういう。

門 確かに。白鳥さんの本を読んで参加しましたっていう方が、2020年以降、

白鳥 本が出たのは21年の秋だから、その後だね。

門 増えて、高い期待値に対して、この無言。どうしようって思うんですけど、でも本当に、みなさんすごい無言だった回の時も、振り返りの時に、今度はすっごく言葉が出てきて、感想をたくさんアンケートにも書いてくださったりとかして。自分が持ってる先入観で、決めちゃいけないなっていうのをすごい実感した回でしたね。

白鳥 それ、俺、毎回思ってますよ。いかに先入観から入ってるかっていうのを。

門 こんなにやってもまだ。

白鳥 こんなにやるからじゃないのやっぱり。

門 え、どういうことですか？

白鳥 あの、だから何回、だから年に10回とか20回とか鑑賞会やってても、鑑賞会の時に考えてることって、結構同じようなこと考えてるんですよ。

門 例えば？

白鳥 やっぱりどれくらい盛り上がった方がいいんじゃないかとかさ、沈黙もいいよなとか、そういうようなことを、ほんと、ほぼ毎回のようによく考えてる。それだけの意味があるっていうことなのかもしれないけど。

(ジングル：ottotto 「CLAP」)

門 明日伺うピクファなんですけれども、白鳥さんとは「モノクローム 描くこと」展の時に、音声ガイドのような感じで鑑賞会した音声を会場で聞けるというコンテンツを作ったことがあり、展覧会の音声コンテンツだと展示が終わると役目も終わってしまうので、今年は何をしましょうかというご相談をした時に、どこかへ行って音だけで楽しめるコンテ

ンツを作ってみたいという提案を私が白鳥さんと岩中さんにしましたら、岩中さんがちょうどピクファの話をされて。ピクファは先ほどもご紹介した「みると話」の第1回目の展覧会（「アール・ブリュット 2022 巡回展 かわるかたち」）に本田雅治さんという作家さんが出展して下さった、ご縁のある先です。それで、つながりもあるし、施設見学を音声でお届けするのもいいかなと思って、ピクファの原田さんに相談したところ、もちろんOKということで実現しました。岩中さん、もしよかったらピクファの提案をして下さった理由とかをお話しただいてもいいですか？

岩中

はい、門さんとその話をするちょっと前に、さっき言っていた〈こここ〉というウェブマガジンで、「こここなイッピン」という福祉施設で作られているプロダクトを紹介するコーナーがあるんです。そこでピクファさんが作っているランチバッグをちょうど紹介したタイミングで、オンラインだったんですけど、ちょっと話を聞いたんですね。（参考：[「こここなイッピン」2025.07.07「“小さなアート作品”つきランチバッグ〈PICFA〉](https://co-coco.jp/products/lunchbag_picfa/)」記事 [https://co-coco.jp/products/lunchbag\\_picfa/](https://co-coco.jp/products/lunchbag_picfa/) ※外部サイト）その時の話がすごく印象的でした。実際に現場には行けてないんですけど。普通、福祉施設って結構閉じられているというか、利用者さんとか関係者さんしか入れなくて、なかなか何をやっているか、中で何が行われているかって分かりにくい場所だと思うんです。ピクファさんは、病院の中にある施設なんですけど、誰でも自由に出入りができて、結構毎日、外から人が遊びに来る場所だよって聞いて。外からの人も、メンバーさんの描いている作品とか作っているもののファンになって、遊びに来て、自然と友達になって、週末一緒に出かけていますとか、そういう話を聞いたり。ピクファのプロダクトと一緒に作っている日東電化工業の早川さんって人の話を聞いたんですけど、その方も、いつも行くたびに、誰がスタッフで、誰がメンバーさんか分からないような、すごいフラットな関係があって面白いって話を聞いていて。そんな場所をちょっと行ってみたいなって、ちょうど思ってたタイミングだったってことと、あと、ちょっと前に、さっき門さんがおっしゃってた、「アール・ブリュット 2022 巡回展」で、本田雅治さんが参加されてた時に、映像ドキュメンタリーを撮っていた、「ゆかい」の池田さんからも、「ピクファ、めっちゃ面白いよ」って話を聞いていて。「ゆかい」の場所で、白鳥さんの個展をやったことがあるんですけど、そういうつながりもあって、ピクファずっと行きたいなって思ってたタイミングでお話をいただいた。（ピクファがあるのは）佐賀ですけど、遠いんですけど、これを機に行きたいなって言ったら、いいですね、みたいな話になった。

門

ありがとうございます。それでは明日、白鳥さんと見ると、いろいろ自分でも思わぬ発見ができるかなと思って楽しみにしています。また明日もよろしくお願いします。

白鳥・岩中

よろしくお願いします。

（ジングル：ottotto 「CLAP」）

第2話に続く